総合医学会報告

2023年シンポジウム：病理ともう一つのAi－病理解剖と Autopsy Imaging

解剖数が減少した現状と対応 病理医の立場から

倉岡和矢† 松浦範明* 福原詩織 岩広和恵
藤澤宏樹 菅 亜里紗 服部勝彦 齋藤彰久
山本利枝 谷山清己

第77回国立病院総合医学会
2023年10月20日 於 広島

IRYO Vol. 78 No. 6 (370－373) 2024

要旨 30年以上，全国的に病理解剖の実施件数は減少傾向にある．病理解剖は診療の検証や医学教育，公衆衛生，研究などにきわめて有用であり，この状況は，懸念すべき問題である．解剖減少の主な要因の一つは，画像診断技術の発展である．近年，病理解剖の代替手段として Autopsy imaging（オートプシーイメージング，以下 Ai）/ 死後画像診断が重用されている．今回，著者らは，解剖数減少の現状とその背後にある要因，および病理医の立場からの Ai 活用を含めた対応策について考察した．解剖数減少の要因としては，上記画像診断技術の発展に加え，臨床業務の増加や病理医不足，臨床医および病理医の専門化による全身臓器相関への関心低下，病院の対費用効果の追求や，在宅，施設など病院外での死亡割合の増加，年間死亡数の増加，病理解剖への無理解（啓発活動の少なさ）などが関与していると考えられた．これらに対して，Ai の活用や病理医の集約化，医学生・研修医への教育，CPC の充実，保険診療以外の財政措置などが対応策として考えられた．また，国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター（当センター）では遺族への病理解剖結果説明会を行っており，病理解剖の啓発活動の一つとなりうることが示唆された．さらに，当センターにおける Ai 症例を病理解剖と比較検討し，Ai の長所と短所について考察した．

キーワード 病理解剖，解剖数減少，画像診断技術，オートプシーイメージング

緒 言

近年，病理解剖の実施件数は全国的に減少傾向にある．病理解剖は診療の検証や医学教育，公衆衛生，研究などにきわめて有用であり，この状況は，懸念すべき問題である．また，解剖数の減少は病理医や検査技師の解剖熟練度の低下や医師研修の機会の減少にもつながる．解剖減少の主な要因の一つは，画像診断技術の発展である．また，病理解剖実施には遺族の同意が得られることが前提であり，さらに病理医や臨床医，技師など医療者側の時間と労力，および病院側の資金が必要である．これらの要素も解

国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター 病理診断科，*放射線診断科 †医師
著者連絡先：倉岡和矢 国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター 病理診断科
〒737-0023 広島県呉市青山町3－1
e-mail：kuraoka.kazuya.vk@mail.hosp.go.jp
(2024年4月3日受付 2024年8月2日受理)
Current Situation and Countermeasures for Decreasing Number of Autopsy from a Pathologist's Perspective
Kazuya Kuraoka, Noriaki Matuura*, Shiori Fukuhara, Hiroki Fujisawa, Arisa Kan, Katsuhiko Hattori, Akihisa Saito, Rie Yamamoto, and Kiyomi Taniyama
Department of Diagnostic Pathology, *Diagnostic Radiology NHO Kure Medical Center and Chugoku Cancer Center
(Received Apr. 3, 2024, Accepted Aug. 2, 2024)
Key Words：pathological autopsy, decreasing number of autopsy, image diagnosis technology, autopsy imaging